

ピリピ人への手紙4章1-9節 「主にある寛容」

1A 主にある協力 1-3

1B 愛する冠 1

2B 福音宣教の戦い 2-3

2A 平和の神の支配 4-9

1B 心と意思を守られる主 4-7

2B 良き物を心に留める責務 8-9

本文

ピリピ人への手紙 4 章に入ります。今晚は、「主にあって広い心」をいかに保つか、ということを見ていくことになります。前回の学びを思い出してください、パウロは3章で、「主にあって喜びなさい」という言葉から始めました。その目的としては、1 節にありますが、「あなたがたの安全のためにもなることです」とあります。主にある喜びによって、忍び込んで来る偽りの教えから守られ、安全だということです。一つは、自分の肉を誇る教えです。イエス・キリストにある喜び、この方を知って、はりさけんばかりの喜びにあふれるのではなく、何か自分が達成したことに誇りを持ちたい、何か自分たちがすることで神に認められたいと思う方向に動くことです。しかし、これらのものは塵芥であり、ただキリストに捕えられたその喜びだけが自分にはあることを話しています。そして、報いは上からの賜物として、与えられることを話しました。主が再び戻られる時に、上から賜物として義を持つことができます(9,14 節)。

それから、もう一つ喜びによって守られる、偽りの教えがあります。それは自分たちの肉の欲望のままに生きて良いとする教えです。なぜそうになってしまうのか？それは、再び主にある喜びが牛れてしまっているからです。それで地上のことを思って、その欲望の中に生きるものであり、パウロは、こう言いました。「3:20-21 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」私たちが天に引き上げられる、そこで主からの栄光に預かることができるということです。教会の携挙があり、自分が死んでいれば復活し、まだ生きているなら体が一瞬にして変えられて、栄光の姿に変えられます。

1A 主にある協力 1-3

1B 愛する冠 1

そこでパウロは結論付けます。1 そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。どうか、このように主にあってしっかりと立ってください。私の愛する人たち。

パウロが再び、「私の愛し慕う兄弟たち」と呼んでいます。パウロが手紙の冒頭で、「1:8 私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをしてくださるのは神です。」と言っていたことを思い出してください。キリストに満たされている時に、私たちには兄弟への愛、慕わしさが与えられます。自分自身を求める時にその愛は冷えますが、キリストを第一にし、兄弟を自分よりも優れているとして敬うと、この愛が生まれてきます。

そしてパウロが、「私の喜び、冠よ。」と言っています。これはどういうことでしょうか？テサロニケ人への第一の手紙で、彼が信者たちのことをこう言っているのです。「2:19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。」パウロが労苦して、新しく信じた者たちを育てていく中で、彼らが主にしっかりと立って、実を結ばせているなら、その報いを主ご自身からパウロが受けるということでもあります。今、天から主が来られて、私たちが同じ姿に変えられるところを読みました。パウロは同じことを考えていたのです。

ここに、福音宣教の熱い思いがあります。何が私たちが伝道する原動力になるのか、何が人々が主にあって育てていこうとする原動力になるのか、それは主ご自身がそのことを願っておられ、私たち働き人にそれを任せておられるからです。この前、韓国の牧師さんと飛行機の中で隣に座って、彼がいろいろな苦労話をしている中で、日本人がイエス様を信じて、すっかり生活も変えられて、純粋に主に仕えている証しをしてくださいました。私もその話を聞いた時に、「いろいろな喜びがあるが、これこそが自分の願っていること、何にもかえがたい喜びだ。」と思いました。それは、主ご自身が願っておられることだからです。

だからパウロは、「このように主にあってしっかりと立ってください。」と勧めています。主にある喜びから離れてはいけない、しっかり立っていないさという事です。

2B 福音宣教の戦い 2-3

2 ユウオデヤに勧め、スントケに勧めます。あなたがたは、主にあって一致してください。3 ほんとうに、真の協力者よ。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください。この人たちは、いのちの書に名のしるされているクレメンスや、そのほかの私の同労者たちとともに、福音を広めることで私に協力して戦ったのです。

パウロは、喜びの手紙の中で、気になっていたことをここで取り上げています。2章2節で、「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と言っていました。そして一致できていなかった二人は、霊的なことよりも世の中が楽しいというような肉的なクリスチャンではなく、ここにあるように熱心な働き手でありました。なぜそのようなことが起こってしまうのでしょうか？熱心であるがゆえに、福音宣教についてこうすべきだ、ああすべきだという意見が強くなります。それで意見の対立が起きています。これは教会に

とって大きな損失です。個人の確執だけに終わらず、教会全体がどちらに付くかという分裂にも発展しかねないからです。

パウロはそこで、「主にあって一致してください。」と言っています。どちら側が正しいのかという判断よりも、またその問題自体を解決させようとしているよりも、同じ思いを持っていることを思い出させています。福音において、彼女たちは同じ思いを持っていました。ただ方法論が異なっていたのでしょう。しかし、パウロは手本を見せました。牢獄に入っている自分を陥れようとして、その妬みを動機として福音を伝えている人が、ローマ辺りにいたようですが、彼は、「つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでます。(1:18)」と言ったのです。キリストが宣べ伝えられるという大義を持っていれば、その他の事柄は小さくなっていきます。

私たちは互いに愛する仲間です。ある友人の牧者が言ってくれましたが、「私たちは時々、遠くから自分たちを眺める必要がある。」というのです。近くにいると、相手の欠点であるようなことが目に付きます。それでそれを直そうとしてしまいます。平安がなくなります。けれども、一歩下がってその相手を見ると、確かにその人は主に忠実に働いている僕であることに気づきます。その人のしている行動よりも、その人を支えている神の恵みを見ることが出来るからです。自分たちのしていることは、大切なんです、大切ではありません。なぜなら、キリストの体であり、神の教会だからです。自分の国ではなく、神の御国です。

そして、他の働き手に、彼女たちを助けてくれるように頼んでいます。「真の協力者よ」と言っています。彼女たちの対立に対して、主にあって仲直りができるように協力してください、と言っています。誰だか分からないのですが、こう言ったら誰であるか、受け手のピリピの教会は理解できたのでしょうか。

「いのちの書に名のしるされているクレメンス」という働き人の名を出しています。ローマ書にも出てくる名前ですが、良く使われていた名前なので同一人物かどうかわかりません。けれども、大事なものは「いのちの書に名のしるされている」という紹介です。これほどのほめ言葉はないと思います。福音宣教の働きの中で、その働き以上にもっともっと大事なことは、神の命の書に自分の名が書き記されているかどうか、ということです。「ルカ 10:20 だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んでではありません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」天の中に入ることのできるその喜びに支えられているか、であります。

2A 平和の神の支配 4-9

1B 心と思いを守られる主 4-7

そして、主にある平安を教える勧めを行なっています。

4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

パウロは何度となく、繰り返してこの勧めを行なっていますね。彼は今、獄中にいます。その外では、パウロを貶めたいと思っている福音宣教者がいます。そしてピリピの教会の人々は、その町の中で強い反対を受けています。それだけでなく、教会の中で二人の働き手の対立がありました。これらのいろいろな問題があるなかで、パウロは最も大事な事、自分を守ってくれるものは、「主にある喜びなのだ」ということを知っていました。

5 あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。

ここは、私の思いを変えたとても意義深い御言葉です。パウロは、主が近いことを意識してこの手紙を書いています。3章9節に「神から与えられる義を持つことができる、という望み」とあります。14節に、「上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っている」とあります。そして先に読んだ「キリストが救い主としておいでになる」という言葉につながっています。

終わりの日において何が起こるかと言いますと、不法がはびこり、偽預言者が増え、多くがつまづき、愛が冷えるとイエス様は言われました。「マタイ 24:10-12 また、そのときは、人々が大ぜいつまづき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。」それから、信仰から離れる者たちが出てくることをパウロは教えています(1テモテ 4:1、2テモテ 3:1-5)。背教も起こることが書かれています。ですから、私たちはしっかり主の教えに立って、そうした偽りの教えに対抗しなければいけません。また信仰から離れる人々、信じていると言いながらその中身が福音ではなくなってしまう人々もいます。

そう思うと、「いったい誰が正しくて、間違っているのか？」と不安になるかもしれません。ある人々は、誰も彼も、「あの人には背教した」と言って警鐘を鳴らしているつもりですが、不安と恐れを駆り立て、またキリスト者のつながりを切ってしまうようなことをします。しかしここでパウロは言っているのです。「主は近いのです。」と。これは、「さばかれるのは主である」ということです。私たちは主のしもべであり、こうした問題は主が解決してくださるのです。悪魔や反キリストを見つめるのではなく、神とキリストご自身を見つめていこうということでもあります。このようにして、主にあって身軽にしていることこそ、主の到来を待ち望む者の姿です。

「すべての人に知らせなさい」と言っていますが、イエス様は分け隔てなく人々に接しました。百人隊長の信仰をほめ、らい病人を直し、悪霊を追い出し、サマリヤの女、不道德な女に近づき、またパリサイ人の家にも入られました。主は父なる神に信頼して、周りにある環境に左右されず、ただ御国の福音だけを伝えるために動かされたのです。その広い心を、全ての人に知らせなさいと命じています。主の働き手で、ある人とのつながりによって批判を受ける人々がいます。例えば、ビ

リー・グラハムはそうでした。大統領のために祈り、また問題を起こした伝道師のところにも近づきました。しかし、それはキリストの心であったのです。

6 何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

主にある喜びを保つのに、広い心を人々に知らせることが第一に必要で、第二に、「思い煩わない」ということが必要です。思い煩いは、主にある喜びを奪い取ってしまう大きな要因となります。そして、これは命令形になっています。「何も思い煩ってはいけません」となっています。選択肢ではないのです。なぜなら、やはり主ご自身の領域に勝手に入り込むことになるからです。思い煩うというのは、自分がそれらの状況の主人であることを意味するからです。そうではありません、自分は神の子どもであり、主のしもべです。主から命じられたことに集中すべきであり、自分勝手に思い込み、動いてはいけません。主から言われたことをただ行う、そしてその責任は主が負ってくださる、という意識が必要です。

そして、「あらゆるばあい」とあります。主は、ご自身が気にかけていない分野はないと言われます。どんな小さな事に対しても、主は関心を持っておられて、それを祈りに持っていくことを主は望まれています。覚えていますか、ペテロは宮の納入金がないので、イエス様のところに来ました。ペテロの釣った魚に銀貨があるから、それを使いなさいと命じられました。「本当は、あなたたちは王子だからね、必要はないんだけど、つまずかせるといけないから。」という軽いノリでイエス様は答えておられます。私は、信者になったばかりの時に大学で持たれていた祈り会で、口内炎のために祈りを他の人が捧げていた姿を見て、驚きました。こんな小さなことも、主が気にかけてくださっています。

それから、「感謝をもってささげる」とあります。基本的に、感謝の心を私たちがもっているということが大切です。「1テサロニケ 5:18 すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」なぜ感謝できるのか？それは、すべてのことに神が主権を持っておられて、この神は良いお方で、善になるべく働かせてくださっているからです。基本的にこの感謝の心があって、祈りや願いを捧げます。詩篇を読むとそれが良く分かります。苦しみの中で嘆くようにいのる祈りにさえ、その苦しい心を注ぎだしてから、主への感謝へと変わっています。根底に主が全てを治めておられるということへの感謝があるのです。

そして、「祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」と言っています。祈りとは、主に対する全般的な祈りです。願いは、もっと具体的に主に自分の必要を知っていただくために話すことです。ここが大事ですね、ある求道者の人と話しましたが、「イエス様を今、信じているっていったね？それに、祈ったとも言った。なら、今、もう一度祈ろうよ。」と話しました。

ところが、こうしたことは言葉にするのは嫌だ、プライベートにしたいとのこと。そこで私は言いました、「神さまと出会うには、やはり言葉が必要だよ。神が言葉を与られたし、神ご自身がことばとも呼ばれている。私たちの人格的な交流で、言葉なしに成り立たない。以心伝心はない。」

これは、信仰者に対してもそうです。言葉に言い表すことによって、初めてそれが願いとして主に聞き届けられます。もちろん、言葉にならない呻きもあり、それさえも御霊が執り成して助けてくださると聖書には約束されています。そして、主は私たちが祈る前からその必要を知っておられます。「主は知っておられるから」といって、それを申し上げないのではなく、むしろ、心の平安を神はお与えになりたいと願われており、そのためには私たちが願いを捧げないといけないのです。「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。(ヤコブ 4:2)」とあります。

すると約束があります。「そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」ここで大事なものは、神の平安の種類です。「人のすべての考えにまさる」とあります。この「考え」は、理解とも訳することができます。自分の理解のすべてを超えて神の平安が与えられるということです。自分の理解する部分では、今、起きていることが全く混乱しているかもしれません。自分の理解では、もうこれで終わりだと思っているかもしれません。けれども、神の平安がなぜかあるのです。それは、私たちが御霊を通して神につながっているからであって、私たちの知性や感情、意志を超えて与える、霊における平安だからです。これは神を信じていない人には、与えられません。

それから、「神の平安」という言葉も大事です。神との平和は、私たちキリスト者は全ての人々が持っています。神に罪によって敵対していたところから、神がキリストによって和解してくださり、神は私たちの敵ではなく、味方になってくださいました。しかし、神の平安は私たちがこのように、積極的に主に祈ることによって、ここに書いてある命令を守ることによって自分のものとすることができます。

そして、「あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」という言葉ですが、ここの「守る」は、戦争をする時の兵士の武具に使うような、「防護」という意味合いがあります。私たちの心と思いというのは、霊の戦いにおいて最前線の戦闘地帯となっています。心と思いに、主は御霊によって働きかけ、またサタンもそこを猛攻撃してきます。ですから、私たちの主眼が、「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。(箴言 4:23)」というものになっていないといけません。ですから、私たちは積極的に祈り、能動的に祈り、それで神の平安で、心と思いを守っていただくようにするのです。

2B 良き物を心に留める責務 8-9

8 最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛

に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。

心と思いを神の平安が守ってくれるとありましたが、その思いをどこに向けるかは、とても大事です。主にあって真実なことのすべて、誉れあること、正しいこと、清いこと、愛すべきこと、評判の良いこと、他の徳と言われているもの、称賛に値するもの、こうしたものに思いを留めます。そうすれば、私たちの心と思いから、こうした良いものが出てくるようになります。入力と出力ではないですが、御霊の流れが私たちの思いと心を通して行なわれます。

思いという領域がとても大切であることを、他の箇所でもパウロは教えています。「ローマ 12:2 この世と調子を合わせたいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」ここは、「思いの一新によって」と書いてあります。それから、「2コリント 10:5 私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」すべてのはかりごと、とありますが、自分の考えていることと、ということとです。これをキリストに服従させるのです。

9 あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。

8 節が、「キリスト者の持つべき正しい思考」であるなら、ここは「キリスト者の持つべき正しい実践」と言えばよいでしょう。思っているだけでは、平和を保つことができません。実際に行動に出しているかどうか、それは大きく影響します。ピリピの人たちは、パウロと時間を過ごしたから、彼がどのようなことを教わり、また彼の行動を見てきたかを思い出すことができます。同じように、キリスト者の間では、「学び、また手本にする」という循環があります。独りでは身に付けることのできないものです。そして、行動に移すことによって、それが思いへも影響するでしょう。交わりの中に入る、しかも、自分に我が儘を許してもらえようなどころではなく、キリストを求めようになさせてくれる交わりです。

ここで、「学び、受け」とあります。学ぶだけでなく、受け入れるのです。学んでいるけれども、受け入れていないことがあります。それは、その人の行ないの実を見れば明らかです。そして、「聞き、また見た」と言っています。ただ聞いているだけでは、分からないことが多いのです。それは言葉であり概念でありますが、生きていることそのものになるためには、見る必要があります。ですから、今はなしましたように、他の信者との関わり、交わりが必要になります。教会として集うことが必要なのです。

そして、約束が「平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」とあります。神の平安が守ってくれるだけでなく、平和の神が共にいてくださいます。これで、先の二人の女性の働き人の確執

への答えとなっていますね。教会内においても、また教会外においても、私たちは自分に関する限り、平和を持つことが命じられています。仕方がなく、それが乱れることがあります。それは自分のせいではないことがあります。そこで思い煩わないでください。パウロでさえ、反対者がおり、対立がありました。しかし、そこで主にあって喜ぶことを知っていました。このようにして生きます。